

マタイ27章27-66節 「恥辱と苦痛の十字架」

1A 主の受けられた恥辱 27-50

- 1B ローマ兵士からの仕打ち 27-31
- 2B 十字架担ぎ 32-38
- 3B ユダヤ人からの仕打ち 39-44
- 4B 父なる神による遺棄 45-50

2A 苦悩の後 51-66

- 1B 御子の力 51-54
- 2B 主に仕えた女たち 55-56
- 3B 富んだ者の墓 57-61
- 4B ローマの番兵 62-66

本文

マタイによる福音書 27 章を開いてください、27 節から読んでいきます。私たちは 27 章の前半部分にて、ピラトが十字架刑の判決を下すところを読みました。これから読むところは、その十字架刑が執行されるところです。四つの福音書は、いずれも十字架刑そのものについては、端的に描いています。なぜかという、それを読んでいる人々はローマ時代の人たちで、どれだけ苦痛と屈辱に満ちた刑であるかは、よく知っているからです。けれども、私たちが現代生きている世界では、あまりにも普通に、十字架をアクセサリーとか教会の看板とかで見るので、そのままのイメージで捉えると、大きな間違いをしてしまいます。しかし、私たちが当時のローマ社会に生きているならば、あまり日常会話の話題にしたくないような内容です。あらゆる刑罰の中で、これが極刑です。

パウロは、「私は福音を恥としません。(ローマ 1:16)」と言いました。しかし、その福音とは十字架に付けられたイエスのことであり、また三日目に甦られたイエスのことでありますが、十字架というのは、その激しい苦痛のみならず、卑しめることが大きな目的です。公然と人々の前で、恥辱を与えて、その人の自尊心を踏みにじるようなことをさせるのが目的です。私たちが恥としない福音とは、公然と辱めを受けたキリストについての福音であります。

1A 主の受けられた恥辱 27-50

1B ローマ兵士からの仕打ち 27-31

27 それから、総督の兵士たちはイエスを総督官邸の中に連れて行き、イエスの周りに全部隊を集めた。

前回お話したように、時系列的には、この出来事は十字架刑の判決が出る前に起こったもの

です。けれども、マタイは、ローマ兵がイエス様に対して行なったことをまとめて、ここ 27 節から話していきたいのだと思います。今、ここは総督官邸です。前回お話したように、二つの可能性があります。一つは神殿の敷地の北に隣接していたアントニア要塞、もう一つは西に位置するヘロデの宮殿です。そこにいたローマ兵たちを皆、集めました。

28 そしてイエスが着ていた物を脱がせて、緋色のマントを着せた。29 それから彼らは茨で冠を編んでイエスの頭に置き、右手に葦の棒を持たせた。そしてイエスの前にひざまずき、「ユダヤ人の王様、万歳」と言って、からかった。30 またイエスに唾をかけ、葦の棒を取り上げて頭をたたいた。31 こうしてイエスをからかってから、マントを脱がせて元の衣を着せ、十字架につけるために連れ出した。

これは、全く十字架で処刑するのに、不必要なことです。けれども、軍隊には付き物と言いますが、その粗暴さがこのような辱めを囚人に対して行ないません。イエス様は、ユダヤ人の王であるという罪状で罪に定められました。カエサルが王なのに、自分が王であると言っているということで罪に定められたのです。それで、からかって王様の格好をさせました。「緋色のマント」というのは、全身を覆う外套ではなくて、ローマの軍人が身に着けていた、短い赤色のマントであったと考えられます。他の福音書では紫色の衣を着せられたと言っていますから、紫の衣で着せられています。その上に赤いマントも付けられたのでしょうか。

そして、王冠を被らせませんがそれが茨で出来たもので、王の笏の代わりに葦の棒を持たせています。そして、「ユダヤ人の王様、万歳」と言ってからかい、また唾をかけています。中東においては、これは最悪の侮辱です。頭も葦の棒で叩いています。ここで茨に注目してください。ローマ兵の意図としていること以上に、神はイエス様が受けられた恥辱をご自分の救いの中に入れていません。主がアダムに対して、語られました。「創 3:18 大地は、あなたに対して茨とあざみを生えさせ、あなたは野の草を食べる。」主がアダムの罪による呪いを、ご自身の上に置かれています。

ここでの屈辱、またこれから見る屈辱はすべて私たちのための苦しみであります。「I ペテ 2:21-23 キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残された。キリストは罪を犯したことがなく、その口には欺きもなかった。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しくさばかれる方にお任せになった。」私たちは、少し侮辱されただけで強く落ち込むか、喧嘩腰になりますが、イエス様は普通ならば耐えられないようなものでした。しかし主はすでに、ゲッセマネの園で、父なる神、正しく裁かれる方にお任せになりました。その神への信頼こそ、彼を今、支えています。

2B 十字架担ぎ 32-38

32 兵士たちが出て行くと、シモンという名のクレネ人に出会った。彼らはこの人に、イエスの十字

架を無理やり背負わせた。

ローマは、十字架刑を執行する時に、その犯人が、自分自身が磔にされる十字架の木を背負わされて、人々が多く歩く通りを歩かされます。これも、見せしめにするためです。しかも、その時は過越の祭りであり、世界中からユダヤ人たちが集まっていました。たまたま、北アフリカの今のリビアのところから来ていたシモンという人がいました。クレネは、ギリシアとローマの時代に栄えていた五つの町の一つです。世界遺産に登録されています。使徒の働きには、何度となくクレネ人のことが書かれており、13章1節には、アンティオケの教会に「クレネ人ルキオ」という教会指導者の名が出てきます。イエス様が甦られ、聖霊が弟子たちに下ってから、クレネにおいて多くの信者が興されたのでしょう。

イエス様は鞭打ちを受けており、かなり体が弱まっていました。これから連れて行かれる処刑場、ゴルゴタまではまだ距離があります。ところで、十字架の処刑場は、城壁の外にありました。ユダヤ人社会でも、処刑をする時は宿営の外に連れていき、石打ちの刑にしていました(レビ 24:14)。また、いけにえでさえもが、罪のためのいけにえは、その肉を宿営の外に行って焼くのです。そこでヘブル書の著者は、信者たちにこう言いました。「それでイエスも、ご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられました。(13:12)」イエス様もエルサレムの町の門の外に連れて行かれています。

その途中で、もう持って歩く力がなくなったので、ローマ兵がそこにいるシモンに無理やり背負わせました。これは法律であり、ローマ兵が荷を持つように命じたら一ミリオン(1500 𐅀)歩かないといけないというのがありました。なのでイエス様は、山上の垂訓で「一緒に二ミリオン行きなさい(6:41)」と言われましたね。シモンにとっては、とんだ目に遭ったのですが、しかし新約聖書は、非常に興味深い記録を残しています。マルコは、シモンが「アレクサンドロとルフォスの父」であると記しています(15:21)。マルコがこれを記している時には、二人はよく知られていた人たちなのでしょう。そしてローマにいる信者たちの中に、「主にあって選ばれた人ルフォス(16:13)」がいるのです。そして先ほど言いましたように、クレネ人は使徒の働きに数多く出てきます。主が、この時を用いて、シモンを通して福音を伝えられたのだと思います。

33 ゴルゴタと呼ばれている場所、すなわち「どくろの場所」に来ると、34 彼らはイエスに、苦みを混ぜたぶどう酒を飲ませようとした。イエスはそれをなめただけで、飲もうとはされなかった。

ゴルゴダというのは、どくろという意味ですが、それは人々が処刑されてどくろになっていくということでも名づけられていました。これをラテン語でカルバリーと言い、私たちの教会の名で使われているのは、「どくろの教会」ということになります。そのような刑場は、大通りにあります。しばしば、私たちがゴルゴダの丘ということで、人々から少し離れたところで処刑されていたように見せてい

ますね、「パッション」の映画でもそうでした。いいえ、「復活」の映画にあったような、人々が多く歩いて行く通りにあります。そうでないと、見せしめにならないからです。ですから、当時はかなり苛酷な社会であったことがお分かりでしょう。公開処刑が私たちがしばしば使う町の通りで、行われていたのですから。

そして、ローマ兵たちは、「苦みを混ぜたぶどう酒を飲ませようとした」とあります。それは没薬や雄牛の胆汁などを混ぜたものです。これを呑むと、意識が朦朧とします。受刑者の痛みを和らげるための麻酔薬、鎮痛剤の役を果たしていたのですが、なんとイエス様は飲もうとされませんでした。どうでしょうか、私たちが外科手術を受ける前に麻酔を拒むことを考えてください。抜歯をする時に、あるいは神経を抜く時に麻酔を拒むようなもの、いやいや、もっともっと激しい痛みが走ります。両手に釘、おそらくは手首のところでしょう、そして足にも釘を打ちます。なぜ、イエス様はそれを拒んだのでしょうか？主は、この痛みを味わうことそのものが、私たちの罪の対価を支払っていることをご存じであったからです。イザヤが、七百年前に預言していたのです。「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。それなのに、私たちは思った。神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。(53:4-5)」この痛みを敢えて受けられることによって、私たちの罪、また罪からもたらされる傷や病を我が身に受けられたのでした。

35 彼らはイエスを十字架につけてから、くじを引いてその衣を分けた。36 それから腰を下ろし、そこでイエスを見張っていた。

イエス様が、十字架に付けられる時に、その木が掘られていた穴に入れられます。その時に、強い振動で、体の関節が外れてしまいます。ですから、十字架に磔にされている時は、なおさらのこと体の至るところに激痛が走るのです。福音書は、先に話したようにこれを読んでいる人は十字架のことをよく知っていましたが、それより千年ぐらい前、ダビデが十字架での苦しみを聖霊によって預言していたのです。午前礼拝で交読した詩篇 22 篇です。あまりにも生々しく、イエス様の心で起こっていることを、聖霊によってダビデが歌っていました。11-18 節まで読みます。

11 どうか私から遠く離れないでください。苦しみが近くにあり助ける者がいないのです。12 多くの雄牛が私を取り囲みバシヤンの猛者どもが私を囲みました。13 彼らは私に向かって口を開けています。かみ裂く吼えただけの獅子のように。

今、ローマ兵たちが近づいて手足に釘を打とうとしています。そして十字架を穴の中に入れます。

14 水のように私は注ぎ出され骨はみな外れました。心はろうのように私のうちで溶けました。
15 私の力は土器のかげらのように乾ききり舌は上あごに貼り付いています。死のちりの上

にあなたは私を置かれます。16 犬どもが私を取り囲み悪者どもの群れが私を取り巻いて私の手足にかみついたからです。17 私は自分の骨をみな数えることができます。彼らは目を凝らし私を見えています。

骨が外れたことを話していますね。それから、極度の脱水症状に陥ります。そして衆人の目にさらされていることを、「彼らは目を凝らし私を見えています。」と言っています。また、ローマ兵が腰をすえて見張っています。反逆者の仲間が十字架から降ろすことのないためです。

十字架上で死ぬ時の死因は、窒息死です。手足に釘が刺さっているので、激痛が走るのを体で垂らしたままにしているのですが、そうすると息が出来なくなります。息をするために体を持ちあげるので、手足に負荷がかかり激痛が走ります。そうやって徐々に、徐々に、死んでいくようにするのです。少しずつ呼吸ができなくなるようにして、その呼吸困難と死にそうな激痛の中で苦しむようにさせます。これで数時間から数日で死にます。そして、死んだらそのまま死体をさらして腐敗するまで待ちます。もう、本当にエグイ光景です。

18 彼らは私の衣服を分け合い私の衣をくじ引きにします。

衣服を分け合うことも、今、ここで実現しています。イエス様が身に着けていた服を分け合います。手作りの衣なので、今よりも高価だったそうです。上着、下着、頭を包む布、サンダルがあります。けれども、下着はつながっているの、切つてしまえば使い物にならないので、それをくじで分けました。こんな細かいことまで、ダビデは聖霊によって預言していたのです。

37 彼らは、「これはユダヤ人の王イエスである」と書かれた罪状書きをイエスの頭の上に掲げた。

罪状書きを十字架の上に掲げるのは、当時の習慣でした。ピラトがこれを書いたのですが、これが私たちキリスト者にとっては、大きな意味を持ちます。ユダヤ人の王である方が、そして王の王であられる方が、しもべの姿を取り、卑しめを受けて私たちの身代わりとなられた、という証しです。イエス様の地上での生涯は、ユダヤ人の王を拝みに参りましたと言った東方の博士たちの言葉から始まり、ユダヤ人の王であるとう罪状書きで死なれるところで終わります。(もちろん、三日目に甦ります。)

38 そのとき、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右に、一人は左に、十字架につけられていた。

ピラトは、この日に三人の人間を十字架の磔にするつもりだったのですが、バラバが特赦で釈放された後は、イエス様がその中に入りました。これは、イザヤの預言の成就です。「53:12 彼が自分のいのちを死に明け渡し、背いた者たちとともに数えられたからである。彼は多くの人の罪

を負い、背いた者たちのために、とりなしをする。」背いた者たちの一人として数えられました。こうやって、私たちのための罪人となられたのです。「Ⅱコリ 5:21 神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方にあつて神の義となるためです。」

3B ユダヤ人からの仕打ち 39-44

ここまでは、ローマ兵から主に受けた恥辱と苦しみであります。次からは、肉の兄弟、同胞であるユダヤ人たちから受けるそしりです。

39 通りすがりの人たちは、頭を振りながらイエスをののしった。40 「神殿を壊して三日で建てる人よ、もしおまえが神の子なら自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」

先に話したように、「通りすがりの人たち」とあるように、大通りで人々が歩いているところに見えるようにしてゴルゴダがありました。彼らは頭を振りながら、イエス様を罵っています。「神殿を壊して三日で建てる人」といっていますが、これはユダヤ人の裁判で出てきた訴えです。イエス様が、ご自分の体のことを神殿と言われて、この神殿を壊して見なさいと言われてました。

ここから、ユダヤ人たちの間で使っている「救い」と、神が御心としておられる「救い」の間には、大きな乖離があったことを思いながら読んでみてください。彼らは、「十字架から降りて来」という、大いなる力をもってその苦しみから救われることこそが、救いであるとみなしています。しかし、いかがでしょうか、神が意図しておられたのは、「罪からの救い」であります。状況から救われても、罪から救われなければ、人は神から離れて、呪われた者、見捨てられた者となります。午前礼拝でお話したように、罪が仕切りとなって、神から引き離されています。そのために、神はご自身の独り子を、人として遣わされ、その肉体において私たちの罪の身代わりとして処罰を受けるようにしてくださったのです。

そして、もう一つ「神の子なら」と言っています。神の独り子である方が、世を救われるキリストとなるということを彼らは信じていました。詩篇第二篇には、「油注がれた者」つまりメシアが表れて、彼を神が、「わたしがあなたを生んだ」と言われて、神の御子であることを話しています。神の子というのは、神ご自身に他ならず、ゆえにその力を使って、十字架から降りて見ろと言っています。けれども、この話、どこかで聞きませんでしたか？そうです、悪魔が荒野でイエス様に言った誘惑です。神の子なら、石をパンに変えなさい。神の子なら、神殿の頂から落ちて見なさい。あの時に誘惑した悪魔が、今、罵りや中傷という形でイエス様に挑みかかっているのです。何とかして、十字架の死によって人々が罪と死から解放されることのないように、猛烈に攻撃しています。

41 同じように祭司長たちも、律法学者たち、長老たちと一緒にイエスを嘲って言った。42 「他人は救ったが、自分は救えない。彼はイスラエルの王だ。今、十字架から降りてもらおう。そうすれば

信じよう。43 彼は神に抛り頼んでいる。神のお気に入りなら、今、救い出してもらえ。『わたしは神の子だ』と言っているのだから。」

イエス様を死刑に定め、ローマ総督に訴え、群衆を煽った張本人たちであります。まるで他人事のように語っています。道行く人々は、「お前が神の子なら」と直接に罵っていましたが、彼らは、「彼は」といって、第三人称を使ってまるで自分が関わっていないかのように話しています。罪を認めるとは、自分自身に責任を認めることと言ってもよいでしょう。ペテロが説教をした時に、この出来事の五十日後、五旬節の時に巡礼に来ていたユダヤ人に真っ直ぐに語りました。「使 2:23 神が定めた計画と神の予知によって引き渡されたこのイエスを、あなたがたは律法を持たない人々の手によって十字架につけて殺したのです。」そして彼らは、「2:37 これを聞いて心が刺され、ペテロとほかの使徒たちに、『兄弟たち、私たちはどうしたらよいでしょうか。』』と尋ねています。それでペテロは悔い改めを勧め、彼らは悔い改め、水のバプテスマを受けたのです。その反面、祭司長たちはペテロに対して、こう言っています。「5:28 あの人の血の責任をわれわれに負わせようとしている。」キリストに対して、他人事のようにあしらうところには、救いはありません。

彼らの中傷の言葉を見ますと、まず、「他人は救ったが、自分は救えない。」と言っています。これはイエス様が数々行われた奇跡で、多くの人が癒されていったことを話しているのだと思います。けれども、自分は救えないと言っています。そして、「ユダヤ人の王」の代わりに「イスラエルの王」と言っています。イスラエルの国を再び興してくださるところの王です。その王なる方が、十字架から降りてもらえば、信じようと言っていて、ローマの十字架に付けられた罪人(ざいにん)など、どうして王だと信じられるのか？という嘲りです。

そして次が興味深いです、「彼は神に抛り頼んでいる。神のお気に入りなら、今、救い出してもらえ。」であります。これはそのまま詩篇 22 篇から来ている言葉です。祭司長たちが詩篇 22 篇を思い巡らしていたとは思えません、やはりここでも主がダビデの口を通して、預言を与えられていたのです。サタンは、私たちをいつも「神に抛り頼んでいる」ところで責め立ててきます。神に抛り頼んでいるといいながら、この有様か？救われているもののように、生きて見たらどうだい？と、自分が苦しみや試練の中にいれば、そう語りかけて来るからです。そして、通りがかりの者たちと同じように、「わたしは神の子だ』と言っているのだから。」と呟いています。

44 イエスと一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった。

なんと、一緒に十字架に付けられている者たちまでが、罵っているのです。ルカによる福音書を見ますと、二人が罵った後に、一人は思い直して、御国に行かれた時は私を覚えていてください、と言いました。けれども、初めは二人とも罵っていました。ルカによる福音書によれば、やはり、「お前がキリストならば、我々を救え」と言っていることがわかります。彼らの意味している「救い」

が、イエス様の与えようとしておられる救いと、完全にずれているからです。

4B 父なる神による遺棄 45-50

しかし、十字架に付けられていた初めの三時間は、それでも人からの嘲りであるということで、まだその苦しみの深部には至っていません。45 節、正午からの三時間が、人類の歴史で最も暗かった時間です。それは、御子が父なる神によって見捨てられていた時間です。

45 さて、十二時から午後三時まで闇が全地をおおった。46 三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

真昼であったのに、闇が全地を覆いました。これは日食ではありません、神が罪に対して裁きを行われている時間です。アモスがこの時のことを預言しました。「8:9-10 その日には、——【神】である主のことは——わたしは真昼に太陽を沈ませ、白昼に地を暗くする。あなたがたの祭りを喪に変え、あなたがたの歌をすべて哀歌に変える。すべての腰に粗布をまとわせ、頭を剃らせる。その時をひとり子を失ったときの喪のように、その終わりを苦渋の日のようにする。」これは、終わりの日に起こることのように預言されています。いや、事実、終わりの日の時のことではないでしょうか。祭りの楽しみがあっても、主がそれを喪に服するように真昼を暗くされます。神は今、ご自分が終わりの日に行われることを、今も、罪に対する裁きとして表しておられるのです。

そして、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」と叫ばれました、これはヘブル語で、詩篇 22 篇の冒頭の言葉です。神から見捨てられる、という、誰も想像できない恐ろしいことをイエス様は受けておられました。私たちは、どんな苦しみを受けたとしても、そこには憐れみの神がおられるという、どこかで安心感があります。神は今、災いを下したとしても、そこには憐れみがあります。しかし、それが全く取られてしまったような状態、それが神から見捨てられることです。しかも、永遠の昔から神のふところにおられた方(ヨハネ 1:18)が、そうなっているのです。それは、私たちが神に見捨てられることのないためです。「申 31:6 主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。」苦しみよりも、もっと恐ろしいことは、神がいないこと、全く生きている意味がないということであり、それを、人々が死後に、終わりの日に、キリストから離れているならば味合わないといけないことなのです。

47 そこに立っていた人たちの何人かが、これを聞いて言った。「この人はエリヤを呼んでいる。」
48 そのうちの一人がすぐに駆け寄り、海綿を取ってそれに酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けてイエスに飲ませようとした。49 ほかの者たちは「待て。エリヤが救いに来るか見てみよう」と言った。

先ほどイエス様が叫んだ、「エリ」がヘブル語では、「エリヤ」に聞こえるのです。ここでも、彼らは

主による救いを期待していました。主が来られる前に、エリヤが来て、建て直すことを、旧約時代の最後の預言者マラキが、その預言の最後で語ったことです(4:5-6)。ですから、エリヤが来て助けるかもしれない、今、このように真っ暗な現象が起こったのだから、エリヤが来るかもしれないと期待したのです。

ところで、再び「酸いぶどう酒」が持ってこられています。これは、口の渇きをいやすために、持ってきたものです。もっと長く生きてほしいと思ったのでしょうか、そうすればエリヤが来るしるしを見ることができないかもしれないと期待したのでしょうか？実は、これは屈辱的なことであるとも言われています。ローマでは公衆便所で、棒に海綿を付けてお尻拭きをします。彼らが海綿を差し出している時に、ローマの人たちは、お尻拭きを連想したかもしれないし、もしかしたら、お尻拭きそのものを差し出したのかもしれない。詩篇 69 篇 21 節に、その屈辱が預言されています。「彼らは私の食べ物の代わりに毒を与え、私が渴いたときには酢を飲ませました。」

50 しかし、イエスは再び大声で叫んで霊を渡された。

ここの表現がとても大切です、イエス様ご自身が霊をお渡しになったのです。主は、すべての状況においてご自分が支配しておられ、ご自身が命を与えられたのです。取られたのではありません、そのことがはっきり分かるのは、他の罪人が脛を折られたけれども、その前にイエス様は死なれていたのです、ローマ兵が折らなくて済みました。

2A 苦悩の後 51-66

1B 御子の力 51-54

このようにして、イエス様は最後の死に至るまで、父なる神に拠り頼んでおられました。彼らは、「自分は救えない」とあざけていましたが、これからが全てを成し遂げた主の死から出て来る、神の力です。数々の大いなる、恐るべきことが起こります。

51 すると見よ、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。地が揺れ動き、岩が裂け、

数々の、終わりの日ではないかとも思われるような徴が起こります。一つは、午前礼拝にお話ししました、神殿の垂れ幕が上から下に裂かれるということです。そしてもう一つは大地震です。ゼカリヤ書 14 章を見ますと、主がエルサレムに来られること、それから主がオリーブ山に立たれると、南と北に別れること。つまり、大きな揺れが起こることが預言されています。その成就ではないのですが、けれども神殿の中心部分が引き裂かれて、かつ地震がエルサレムで起こることになると、主が戻って来られたのを前もって示しているかのような現象です。

52 墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる人々のからだが生き返った。53 彼らはイエスの

復活の後で、墓から出て来て聖なる都に入り、多くの人に現れた。

次の徴は、なんと聖徒の復活です。主が来られる時に、眠っている者がよみがえる預言が、ダニエル書 12 章にあります。「12:2 ちりの大地の中に眠っている者のうち、多くの者が目を覚ます。ある者は永遠のいのちに、ある者は恥辱と、永遠の嫌悪に。」この出来事は、イエス様が死なれて、三日目に甦られてから起こったのですが、イエス様が甦られたら、旧約時代に眠っていた聖徒たちも甦りました。これは、主がこれから行われることの前触れであります。旧約時代に死んだ聖徒たちは、天に引き上げられています(エペソ 4:8-10)。そして、主が再び天から降りて来られる時に、キリストにあつて死んだ者も同じようによみがえり、生き残っている者たちは一瞬にして変えられ、空中にて主にお会いします。

54 百人隊長や一緒にイエスを見張っていた者たちは、地震やいろいろな出来事を見て、非常に恐れて言った。「この方は本当に神の子であった。」

非常に興味深いことが起こります。これまで、ユダヤ人たちはイエスが救い主であれば、自分を救えるはずだ、そして神の子であるならば、十字架から降りてくることができるはずだと罵りましたが、異教徒であり、不信者であるはずのローマの百人隊長の口から何と、「この方は本当に神の子であった。」と言ったのです。彼こそが、処刑の一部始終を見張っていた者です。そして、ユダヤ人たちの罵りを、聞いていました。けれども、そこにあるイエス様の姿、また真昼に真っ暗になったこと、それから死後に起こった現象、これらを見て、確かに神の子なのだと思ったのです。ローマ人であり、聖書を知りませんから、ちょっと違った意味で、ローマの宗教の中で言ったのかもしれませんが、それでも、真理にかなり近づいているのです。このように、百人隊長は、聖書の中で肯定的に出てきます。すでに、異邦人なのに信仰の偉大さをイエス様からほめられたことがあるし、使徒の働きではコルネリオが信仰を持ちます。

2B 主に仕えた女たち 55-56

28 章から復活の場面が出てきますが、それでも既に、夜明けが始まっていると言っても良いでしょう。復活の証人となる女たちの姿が登場します。

55 また、そこには大勢の女たちがいて、遠くから見ていた。ガリラヤからイエスについて来て仕えていた人たちである。56 その中にはマグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子たちの母がいた。

これまで、ガリラヤの宣教の働きでは、弟子たちの姿が前面に出ていましたが、実は彼らの日常の入用のために仕えていた女たちがいました。七つの霊を追い出していただいたマグダラのマリアもいますし、ゼベダイの子、つまりヨハネとヤコブの母もいます。イエス様に、息子を左の座と右

の座に着けてほしいと頼んだ母です。そして、もう一人のマリアがいますが、彼女たちは遠くからこれらのことを見ていました。彼女たちのイエス様への愛の表し方、また悲しみの表し方であったのでしょう。

3B 富んだ者の墓 57-61

このようにして、弟子たちが今、逃げ去っていなくなった今、弟子たち以外の人たちを神がお用いになっていきます。百人隊長がまず、神の子であることを証言しました。そしてこの女です。それから、次に隠れキリシタンならず、隠れ弟子が表に出てきます。

57 夕方になり、アリマタヤ出身で金持ちの、ヨセフという名の人 came。彼自身もイエスの弟子になっていた。

夕方になれば、安息日に入ります。ですから、死体を葬ることができなくなります。また、ユダヤの律法では、木につるされたものは神に呪われているから、次の日まで残しておいてはならないと命じられています(申命 21:22-23)。そこで、アリマタヤのヨセフが表れたのです。ルカの福音書によれば、彼はサンヘドリンの一員でしたが、神の国を待ち望み、議員たちの計画や行動には同意していなかった、とあります(23:51)。そして彼を手伝っているのは、ヨハネの福音書によるとニコデモです。彼も隠れ弟子だったのです。

ここで大事なのは、彼が「金持ち」だということです。もし、ここままであったら、十字架上の罪人はそのまま木につるされていて、あとは穴の中に捨て置かれるだけでした。けれども、ここで進み出て自分の財を使って、イエス様を葬るのです。

58 この人がピラトのところに行って、イエスのからだの下げ渡しを願い出た。そこでピラトは渡すように命じた。59 ヨセフはからだを受け取ると、きれいな亜麻布に包み、60 岩を掘って造った自分の新しい墓に納めた。そして墓の入り口に大きな石を転がしておいて、立ち去った。

単なる罪人であれば、ピラトは言うことを聞かなかったのですが、サンヘドリンの議員ですから願いを聞き入れました。そして、彼はなんと自分自身のために掘っていた新しい墓、誰も葬られたところのない墓にイエス様を葬ったのです。きれいな亜麻布で包み、また死体を守るために、石も転がします。なぜ、マタイや他の福音書の著者が、このことを強調しているのか？イエス様が、聖書に書かれていることが実現しなければならないということを言っていたことを知っているからです。預言者イザヤが、一見、奇妙なことを言いました。「53:9 彼の墓は、悪者どもとともに、富む者とともに、その死の時に設けられた。彼は不法を働かず、その口に欺きはなかったが。」悪者に数えられているのに、なぜか富む者とともに墓が設けられます。これは、おかしいのです。悪者は、野垂れ死のようにして死ぬことが、神の裁きなのです。けれども、主はアリマタヤのヨセフがするこ

とをご存じでした。

61 マグダラのマリアともう一人のマリアはそこにいて、墓の方を向いて座っていた。

ここで、復活の第一目撃者をマタイは記録しています。確かに、彼女はイエス様が死に、葬られたことを目撃していました。だれも、その前にイエス様の死体を盗んでいません。

4B ローマの番兵 62-66

ダメ押しは、神のユーモアでしょう、ユダヤ人の指導者らがイエス様が確実に死んでいることを固める手助けをしていることです。

62 明くる日、すなわち、備え日の翌日、祭司長たちとパリサイ人たちはピラトのところに集まって、
63 こう言った。「閣下。人を惑わすあの男がまだ生きていたとき、『わたしは三日後によみがえる』
とっていたのを、私たちは思い出しました。64 ですから、三日目まで墓の番をするように命じて
ください。そうでないと弟子たちが来て、彼を盗み出し、『死人の中からよみがえった』と民に言うか
もしれません。そうなると、この惑わしのほうが、前の惑わしよりもひどいものになります。」

ここでイエス様の敵であった宗教指導者たちが、弟子たちよりもはるかに、三日目に甦るとイエス様が言われていたことを覚えていることが、興味深いです。これから、徐々に弟子たちの心の鈍さについて、マタイは明らかにしていきます。初めに、百人隊長が神の子だと言ったこと。女たちが墓の石が転がされる場所まで見ていたこと。そして今、イエス様の敵であるはずの宗教指導者らが、その三日目の復活を意識していたことです。弟子たちが一番遅く、イエス様の復活を認めるようになります。神の皮肉というか、人間の皮肉なのでしょうか。もっともイエス様から訓練を受けていたはずの者が最も遅かった、初めの者が後になり、後の者が初めになるという原則がここで働いています。

65 ピラトは彼らに言った。「番兵を出してやろう。行って、できるだけしっかりと番をするがよい。」

66 そこで彼らは行って番兵たちとともに石に封印をし、墓の番をした。

彼らのおかげで、番兵も付き、弟子たちが盗んだという説が証拠つきで否定されることになりました。主は、よみがえりを示すために、初めに死んでいることを明らかにされました。かつて、エリヤは主が天から火を降らせることを示すために、祭壇に水をたくさん注がせましたね。わざと、その反対の事をさせたのです。命が新たに与えられるために死ななければいけなかったのです。ご自身の死こそが、父なる神が命をもたらす条件であったのです。キリスト者も、「生きるために、自分に死ぬ」という原則の中に生きています。主に倣って、神に信頼し、不条理の中でも自分を任せて行くことを学んでいきましょう。